

# 「海外における日本文化資料の評価とドキュメンテーション」から観る在外日本美術コレクションとイメージデータベース

鈴木桂子（衣笠総合研究機構）

## はじめに

デジタル・アーカイブなど、文化資源のデジタル情報を、現代的な文化情報と定義するならば、今まで様々な境界によりその先へ進むことを阻まれていた研究の領域・可能性に越境し進む可能性が見えてくる。その一方で、日本という地域に密着・限定した形で進められてきた日本文化研究については、新しい研究の枠組みの構築を迫られているともいえるだろう。

ここでは、「海外における日本文化資料の評価とドキュメンテーション」についての研究の一環として、その新しい枠組みとしての「国際的な日本文化研究」の可能性を顕著に示す例としての在外日本美術コレクションをとりあげる。そして、越境・国際連携の重要性と、そういった研究を支援・推進する強力なツールとしてのイメージデータベースについて論じてみる。

日本の美術品は、南蛮貿易、オランダ東インド会社との貿易、開国後の浮世絵や廃仏毀釈の結果としての仏教美術の流出、戦後の混乱期の米国への美術品の流出など、様々な理由で海外へ流出していった。海外の日本美術を調査・研究する意義は様々にあるが、ここでは、三点に絞って論じてみる。

## 1. 美術品の制作年下限設定の可能性

在外日本美術コレクションを研究することの利点の第一には、美術品の制作年下限設定の可能性を挙げることができる。日本の美術品が、海外の美術館・博物館に収蔵品として受け入れられ目録(インヴェントリー)に記載されているということは、収蔵の年や、場合によっては、その他の

情報(収蔵に至る経緯、例えば、誰からの購入・寄贈・委託か。購入の場合、その時の値段。収蔵時の美術品の状態レポート等)が文書化され、現在においてはイメージデータベース化されている可能性が高いとみていい。このような文化情報は、日本国内にある日本美術品、特に工芸品・民具・その他の物質文化等の作者名・制作年の判らない作品の年代の特定に非常に役立つものである。つまり、もし仮に国内にある作品と全く同一の物が海外の美術館のイメージデータベースに載っていることが判ったとするならば、海外流出にかかった時間を考慮し、その収蔵年よりも以前に国内の作品は作られたのではないかと類推できる。換言すれば、作品の基本的な情報である制作年の下限が設定できることになる。

## 2. 近世出版文化研究への貢献

在外日本美術コレクションを研究することによる第二の利点は、近世出版文化の基礎情報収集に関するものである。浮世絵や版本など木版による近世出版文化の研究には、複数の版の比較研究が基本であるが、浮世絵は海外に大量に散在している。例えば、海外の浮世絵コレクションの代表的なものには、英国のヴィクトリア&アルバート博物館(38,000枚)、大英博物館(14,000枚)、スコットランド国立博物館(4,700枚)、米国のボストン美術館(60,000枚)などをあげることができる。複製芸術としての浮世絵の基礎情報、例えば、同板・異版、続絵(複数の版面により、一つの画面を構成するように意図して制作された版画)・組物や揃物(一つの表題のもとに何枚かの版画で一組となっているもの)などに関する情報の構築や補完には、このように世界中に散在する浮

世絵を無視することは到底できない。

なお、この問題に対しては、この10年ほどで国内外の有数なコレクションが次々とオンライン・データベース化され、世界中での情報の蓄積・共有化に目覚ましい成果があがってきている。これには本研究プロジェクトの研究代表者である赤間亮教授の構築したARCモデルが大きく貢献している。このモデルでは、研究者が、自分の研究対象としているコレクションの所蔵機関へ赴き、コレクションの悉皆調査とデジタル撮影を同時に遂行し、所蔵機関の運営に活用できる高精細画像を作成する(赤間 2010)。このためもあり、今やデータベースは浮世絵研究に必須のツールとなった。

### 3. 多極的・多様な異文化交流研究の可能性

第三に、異文化交流という観点から日本美術を研究するためにも在外日本美術研究および国際連携は不可欠である。日本美術の西洋美術への影響の例としてジャポニスムはあまりにも有名である。特に、浮世絵が19世紀後半フランス印象派の画家達に与えた影響についてはよく知られているが、海外に流出した日本美術は浮世絵だけではないし、美術品の西洋への流出・輸出の歴史も17世紀の「南蛮漆器」の輸出に遡ることができる。また、そういった異文化交流には以下のような社会集団が複雑に関わりあっていたことが、次第に明らかになってきた。

制作者:作家、職人、工房、金主、版元  
輸出・流通(プロモーションを含む):オランダ東インド会社、国内外の貿易商・美術商、百貨店、幕府・藩・日本政府、万国博覧会、オークション  
消費者・コレクター:王侯貴族、米国新興富裕層、お雇い外国人、新興中流階級、美術館・博物館

もう一点、このような異文化交流について考えなければならないのは、異文化交流は通常、日本と西洋の二者間の交流という枠組みで捉えら

れがちだが、実際には他の様々な要素が介在している点である。例えば、ジャポニスムの興隆以前に、西洋人は、およそ2世紀に亘り中国美術に慣れ親しんでいた。であるから、日本美術が紹介・受容された時、よく知っている中国美術との比較・関係的な知識をベースにし、最初は理解・イメージされたことを考慮に入れなければならない。

このような異文化理解の仕方は、例えば、伊万里焼の対外輸出の経緯とも関係している。中国が明朝から清朝へ変わった後、17世紀中頃、明の復興を掲げ鄭成功などが抵抗を繰り返し、結果として景德鎮から西洋への陶磁の輸出が一時途絶えた。その「景德鎮磁器の代わり」として、東インド会社を通じて大量に中東やヨーロッパへ輸出されるに至ったのが、伊万里焼である。例えば、柿右衛門様式による『色絵傘人物文大壺』(17世紀、東京国立博物館所蔵)には、唐人の描写など、その意匠に中国趣味がよく見て取れる。柿右衛門様式の磁器は最高級品としてヨーロッパへ輸出されたが、それだけでなく、影響を受けたマイセンなどで盛んに模倣されたほか、景德鎮でも、同様の作品が作られやはりヨーロッパに輸出されるに至った。

江戸時代の着物の輸出のケースも、多極的・多様な物質文化の国際交流を物語るものである。着物は、東インド会社によって17世紀より輸出されていたが、多くはオランダ商館長とその部下の年一度の江戸参府の返礼として入手したものであり、先述のケンペル参府の際、商館長が将軍より贈られたのは絹の着物30枚だったなど、数に限りがあった。しかし「この着物はゆったりとした着心地のよいかたち、豪華な生地の魅力とともに、当時流行していた異国趣味ともあいまって、オランダで日本の室内着〈ヤパンセ・ロッケン〉と呼ばれてたいそう好まれ、上流階級のステイタス・シンボルとなっていた」という(深井 1994:22)。この圧倒的な需要に対応するために、様々な模倣品が日本以外の地で作られた。例えば、オランダ貿易の拠点であるインドで、日本「風」室内着がインド更紗で作られたり、ヨーロッパの国々でも中国絹で作られたりした。こういうものが、オランダではヤパンセ・ロッケンと総称されている他、

イギリスではバニヤン(インド洋貿易で活躍した、インド北部・東部を拠点とした商人カーストの名称に由来)と呼ばれている(深井1994)。この点については、当時「日本のガウン」と、「インドのガウン」が差し替え可能な言葉として使用されたことも文書に残っている(スクリーチ 2006:70-71)。

#### 4. 国際的な文化研究のパラダイムとしてのイメージデータベース

以上のような点から、在外日本美術研究の重要性と、そのための国際的な連携の必要性はいくら強調しても強調し過ぎることはない。ここで述べたように、日本美術は様々な社会集団の関与を経て、時間・空間・ジャンル(日本での日用品が、異国で珍品扱いされ、後に博物館のコレクションになる等)を越えていく。そして、こうした多極的・多様な美術品・物質文化の研究を支援・推進する強力なツールとなるのがイメージデータベースである。その利点について赤間教授は、「イメージデータベースの場合、イメージという共通言語によってコミュニケーションが図られるため、言語の壁を越えた共有化が可能となる。すなわち、国と地域を越えたグローバル化が求められている人文科学にとっての新しいツールであり、新しい研究環境である(2010:4)」と論じている。

ここで注意したいのは、イメージデータベースの場合、グローバルという言葉がローカル一箇所の対極として位置するのではなく、複数のローカル拠点のグローバルなネットワークという構造が想像できる点である。そのネットワークの中でイメージの共有・競合・変遷を調べていくことで、貿易ルートや異文化交流の各ローカル拠点の役割や、そこを経ての文化情報のプロセスが理解できるのである。そういう意味では、イメージデータベースは研究環境というよりはむしろ国際的な文化研究のパラダイムを提示するものであるといえるだろう。またイメージデータベースは、言語の壁を越えるばかりでなく、ジャンルの壁を越えるにも有効である。媒体・形体がそれぞれに異なる絵画・様々な美術工芸品・着物などのデザインやモチーフの共有・転用・変遷などの研究も、一旦、そ

れをイメージデータにしてしまうことにより画一的に扱うことができ、比較研究が容易となる。この面でも、イメージデータベースは今後ますます有効なツールとなることが期待できる。

#### おわりに

本論では、デジタル・アーカイブなど、文化資源のデジタル情報を、現代的な文化情報と位置づけることにより見えてくる、国際的な日本文化研究の可能性と、そのための国際連携の必要性について論じてみた。国際的な連携が特に必要な日本研究分野の代表的な例として、在外日本美術コレクションの研究をとりあげ、多極的・多様な文化の様相を捉えるための有効な研究支援ツールとして、イメージデータベースについて説明した。ツールとしてだけでなく、国際的な日本文化研究のパラダイムを示唆するものとして、イメージデータベースの更なる可能性について、文化情報学という枠組みの中で研究していく必要がある。

#### 引用文献

赤間亮「日本文化研究とイメージデータベース—ARCモデルの実践と可能性」(赤間亮・富田美香編『イメージデータベースと日本文化研究』シリーズ 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ Vol. 02、ナカニシヤ出版、2010年、1-17頁)

タイモン・スクリーチ『江戸の英吉利熱—ロンドン橋とロンドン時計』(講談社、2006年、70-71頁)

深井晃子『ジャポニスム イン ファッション—海を渡ったキモノ』(平凡社、1994年)